

『三里湾』評価をめぐる問題

加藤 三由紀

一

建国後、中国農村は土地改革を経て互助合作へと歩を進めたが、一九五〇年代後半の急進的農業集団化政策とそれに続く大躍進期の人民公社化政策が深刻な農村荒廃を招き、農民の生産意欲を失わせた。中国農村の歩みは、その後も紆余曲折した道をたどる。農民のための文学を叫んでやまなかった趙樹理（一九〇六―一九七〇）は、このような状況をいかにとらえていたのだろうか。従来、それを語る資料はあまりにも乏しかったが、一九七八年に趙樹理の名誉回復がなされてからは、新資料、未公開資料が相継いで発表された。

『趙樹理文集』⁽¹⁾（一九八〇年）に、二通の私信「長治県のある地方委員への手紙」（一九五六年）と「邵荃麟への手紙」（一九五九年）とが収録された。この中で趙樹理は、党中央の基本政策と農民の欲求との矛盾、上級機関の現状把握と農村の実態との乖離、そして、両者の狭間で出路を見出せずにいる自らの苦悩、焦燥感、状況に流されていく上意下達式の基層幹部に対する怒りを露にしており、当時発表された作品からは推察できなかった内心の一端をのぞかせている。同じく『趙樹理文集』によって初めて公けにされた「人民公社はどのように農業生産を指導すべきかについての私見」（一九五九年）では、人民公社制度下において生産単位の自主権拡大が必要であることを理論づけ、更に食糧の統一買付、

統一販売政策が農村に食糧不足をもたらしていることを指摘し、農政の変革を求めている。《紅旗》に投稿したが採用されなかったこの一文が、反右傾闘争の際、趙樹理右傾の証左とされ、批判運動が展開されていたことも、意外な事実だった。

下郷先で農村工作に従事していた趙樹理の作風を伝える訪問記や追憶録は、上級の命令至上主義に対して毅然たる態度で臨み、農民の要求を幾許なりとも実現させようとした趙樹理の姿を描出している。だが、その確固とした行動の裏面には、農民との間の溝が強く意識されていた。彼は、しばしば農村に“戸口”を持たぬことを工作の障碍として挙げている。又、大連会議における発言にみられるように、党の政策の失調が必然的に惹起する農民の否定的側面を痛感していた。

これらの資料から、職業作家ではなく、“本業”の農村工作を“助”けるために筆を執る“助業作家”であり続けようとした趙樹理の、現実とのかかわりを追うことは、ともすれば平板になりがちな“人民作家”趙樹理のイメージにくらみを与え、“人民作家”の意味を問いなおすことにもつながるだろう。

さて、『三里湾』（一九五五年）において農村の初級合作社化運動を歌いあげていた趙樹理が、以上のような問題に苦悩するようになったのは、彼自身語るように、一九五六年、農村が急激に高級合作社化されてからである。『三里湾』は、彼の思想と党の農村工作の歩調とが、基本的に一致していた時期の最後の作品であり、『三里湾』創作の基盤となった下郷体験は、その後もしばしば思い起こされ、社会主義農村建設工作の原体験としての意味を持つといえる。趙樹理にとって、『三里湾』完成までの一連の営みは、建国後の彼の後半生の中でも、最も希望に満ちたものだったのだろう。

『三里湾』は、趙樹理にとって、又、中国農村の集団化の歴史においても、一つの節目となる時期に発表された作品として位置づけられる。本稿では、『三里湾』発表前後の社会背景を整理しつつ、趙樹理の現実とのかかわり方、一九五

○年代半ば以降の趙樹理の内心の葛藤を、『三里湾』評価をめぐる問題から考察したい。

二

『三里湾』の舞台は、老解放区の模範的な村である。経験豊かな幹部がそろっており、何か新しい運動が提起されると、まずこの村で試験される。一九五一年、先進地区として農業生産合作社を成立させた。趙樹理は、一九五二年九月一日から国慶節前夜の三十日までの一ヶ月における村の動きを、収穫にいそむ村人の様子に合作社拡大工作を絡ませて描いていく。

合作社の問題点は、人手に比して土地が少なく瘦せていることである。その原因を、文化程度のあまり高くない支部書記の王金生は、『高大好剝』の四文字でメモに記す。『高』とは、土地改革時に高い利益を得た家、『大』とは、大家族なるがゆえに一家の土地所有面積が広い家、『好』とは、所有地が特に肥えている家、『剝』とは、以上の好条件を生かしていくらか搾取している家を指し、いずれも合作社には熱心でない。幹部たちは、二つの対応策を検討している。一つは、これら四種の農家が属す互助組内に合作社入社を希望する家があれば入社を許可し、互助組をなし崩しの解散の方向へもって行き、四種の農家を孤立させ入社へ導く——解散から入社へというコース、もう一つは、互助組をしっかり指導して、ある程度進歩したら、互助組全体で入社するよう指導する——進歩から入社へというコースである。入社をめぐる分家問題をおこしている大家族についても、前者は分家を勧める立場、後者は和解を勧める立場をとる。

ストーリーは、合作社拡大工作と緊密に関係する用水路開鑿問題の鍵である、馬多寿一家がその所有地の刀把上（庖丁の柄）を合作社に提供するかどうかを主線に展開する。

馬多寿一家は、“大好剝”の三条件を兼備した昔からの中農である。次男一家は幹部として、三男は兵士として外地へ赴任しているため、土地の広さの割に人手が足りず、王満喜と黄大年の労働力に依存している。王満喜は独身で、財産といえば三ムー（約二〇アール）の土地しかない。力持ちの黄大年は、夫婦二人分の土地では力が余る。彼らは、馬多寿が大部分出資して買った水車を核に、一つの互助組に結集しているが、実質的には馬家の雇用人も同然である。

この冬に開鑿工事を計画している灌漑水路が刀把上を通ることになった。合作社は馬多寿に土地の交換、もしくは買収による刀把上の提供を申し出た。用水路が完成すれば三里湾全体が灌漑され、王満喜や黄大年の土地もその例外ではない。馬多寿は、土地提供が互助組解散につながり、自家の労働力不足を引き起こすと考え、提供に応じようとはしない。古参党员で村長の范登高も、この互助組の一員だが、暗に馬多寿を応援している。“高”の部類に入る彼は、互助組解散、合作社拡大によって、人を雇って商売するうまみや、有利な土地条件が生む収益を失いたくないからである。事態の進展につれて、進歩から入社へのコースを主張する范登高の思惑が明らかになっていく。党员として進歩分子を装いながら、馬多寿を庇う彼に対して、村人の批判が高まり、彼への不信が合作社拡大工作の妨げにまでなってしまう。このため、批判大会が開かれた。古参党员としての面目を重んじた范登高は、不本意ながらも合作社に入る。

刀把上も、名義上の所有者が馬多寿の次男だったことから、無事、合作社に提供された。馬家では、初級中学に通っていた末子の馬有翼を一人前の労働力に鍛え上げること、個人経営を続けようとする。しかし、馬有翼は、このまま古い家のしきたりに縛られていたのでは、恋人にも見捨てられてしまうと焦り、分家を決意する。頼りにしていた息子の離反に落胆した馬多寿は、算盤をはじめてみても入社が有利と出たので、合作社に入った。

こうして合作社拡大工作は成功するのだが、小野忍も次のように指摘する。

終りはばたばたと片づいて少しあっけない。中国の批評家もこの点をこの小説の欠点としてあげている。⁽⁵⁾

このような印象を与えるのは、第一に、ストーリー展開のもう一本の糸、三カップルの結婚問題も、最後の数章で恋愛から結婚まで一気に進んでいるためと考えられる。

元来、趙樹理は、第一部分に一晚、第二部分に一日、第三部分に一ヶ月、第四部分に一冬を配していた。だが、第三部分で合作社拡大に成功した後、六人の青年が用水路建設、合作社運営の充実のために働く間に互いの伴侶を見定めるといふ筋が設けてあった第四部分は、主要な問題が解決しているので削ってしまい、第三部分に繰り込んだという。

なぜならば、私はものを書く時、いつも読者のことを考える習慣がついている。農村の読者のためを考えると、お金をあまり使わずにすむよう、時間をあまりかけずにすむよう、そして大きな効果が得られるようにしなければならぬ。だから、私は字数を最少限におさえた。⁽⁶⁾

構成の変更は、確かに結末の慌しさを増幅しているが、問題は、康濯が言うように、「三カップルの結婚の運命と、作品の主要な闘争（合作社拡大、用水路建設の問題）における運命とが完全には一致しておらず、多少遊離している」⁽⁷⁾所にある。

六人の青年が織りなす恋愛は、「愛情を欠いた愛情描写⁽⁸⁾」と評されるように、その描写は『福貴』における福貴と銀花の情愛、『登記』における小飛蛾と張木匠の愛憎に比すべくもない。六人がそれぞれの家庭条件を考慮しつつ伴侶を選ぶ過程を描くことで、各家庭の内情を説明し、彼らの選択が従来の家族関係を変えるであろうことを示しはするが、それは主線を展開する為の道具立てにすぎない。ゆえに主線の問題が解決されると、結末をまとめるために結婚が決まる。このような大団円によるしめくくりは、作品の完成度を著しく削ぐものといえよう。

結末の慌しさを感じさせる第二の要因は、范登高、馬多寿の入社が思想的変革を伴わぬことにある。内面の変革を経ぬ、外的状況による変革など無意味に等しい⁽⁹⁾、とする批判もあるが、「熱い思いが一方にありながら、簡単に説得され

る、あるいはまたたいへんものわりのいい農民像をつくりださないところに、趙樹理と「よそ者の文学者」あるいは皮相の取材文学とのわかれ道があるように感じられる」と釜屋修が述べるように、趙樹理自身も「范登高の転換は、小説では解決されていない」と言い、かえって千篇一律の反省過程を描くことに疑問を提出している。

それでは、内面的変革を経ずして合作社に入ることのリアリティを支える外的状況は、いかに描かれているのだろうか。

第十二章から第十五章にかけて展望される三里湾のパノラマは、ストーリーや人物描写と何の脈絡もなくはめこまれており、不用であると言う評論が何篇かある。⁽¹²⁾これら四章では、用水路開鑿の意義と、それを阻む刀把上提供問題も説かれてはいるが、確かに、主線に直接かわってくる事柄は少ない。だが、趙樹理はこの部分の描写に自信を持っている。⁽¹³⁾この部分では、合作社の最小単位の労働組織である作業班を、各章に一組ずつ配し、その作業現場を何課長が見学するという設定のもとに、三里湾の自然環境や村の構造が明らかにされる。そして、作業風景の描写に、合作社運営の基本理念がとけこんでいる。このような意味をもつ描写は、『三里湾』の随所にみられ、合作社拡大工作に腐心する幹部の働きと相俟って、合作社の魅力、そこに息づく人間の魅力を表現しているといえよう。村の発明家で試験田にもとりくんでいる王玉生、野菜作りの名人として技術組を指導している王興、山地組のリーダーで植林をはじめとして三里湾の環境整備にもつとめる牛旺子、彼らは「自分の興味を次第に生産目的（経済収入 原注）から生産工作自体へと移し」⁽¹⁴⁾「ていく人間であり、彼らを描く趙樹理の筆には、深い愛着がこめられている。第二十五章で、合作社への愛情を王興に発露させ、范登高に対する最も根源的な批判をあげせる役を牛旺子に与えたのも頷ける。

『三里湾』執筆前後⁽¹⁵⁾（一九五五年十月）で、趙樹理は『三里湾』の欠点を三つ挙げている。第三の欠点については後述することにして、第一、第二の欠点をみてみよう。

一、仕事を重んじ人物を軽んずる——魏占奎、秦小鳳、金生夫婦、何課長、張信、牛旺子らは、顔を見せるだけで、彼らの果たす役割を示していない。

二、古いものが多く新しいものが少ない——馬多寿らの方がやはり金生、玉生よりも目立っている。

作者自身、自覚しているように、范登高、馬多寿を包み込んでいく合作社を荷なう一人一人の描写は断片的で、合作社の機関車役である王金生も概念的である。にもかかわらず、三里湾の合作社のイメージはかなり鮮明であり、躍動感を与える。それは、一見、主線にかかわってこない、不用と思われるものを丹念に描きこみ、点景としてしか登場しない人物にも、それぞれに三里湾を支える自負を持たせているからだろう。

三里湾の合作社をこのように描くことで、趙樹理は主線の解決を導く外的状況を創出した。更に言えば、范登高や馬多寿を包摂するに足る力を備えた運動を描くために、主線となる事件が設けられたのであり、その運動を描ききれば、主線の解決も容易に与えられるのである。そして、このような方法こそ、下郷体験の中で趙樹理が汲み取ったものを発展させた成果ではないだろうか。

三

趙樹理に下郷を勧めたのは、胡喬木だった。

彼は私にこう言った。君は、入京（一九四九年三月）以来、仕事もうまくいかず、生活体験もやりそこねてしまった、大衆の新しい生活の息吹きに触れず、昔の農村の相も変わらぬ印象に頼っていたのでは、よいものを書くことができない、と。⁽¹⁶⁾

一九五一年二月～三月、故郷の山西省晋東南部へ赴いた趙樹理は、農村の新しい変化と動向を知るため、一ヶ月余り

を武郷県ですごし、初級合作社の設立と拡大運動に参加した。翌年、平順県川底村に数ヶ月間滞在し、本格的に合作社運営にとりくんだ。この体験が核となって『三里湾』は生まれる。

川底村合作社は、⁽¹⁷⁾ 海拔千二百メートル―千三百メートルの高地にあり、乾燥した気候で寒さも厳しく、耕地は分散している上に、石が多く土が少ない。主な栽培作物は、トウモロコシと粟である。一九四二年に減租減債運動が行われ、一九四三年、当年入党した川底村の農民郭玉恩が先頭に立って、互助組を組織し始めた。戦争終結とともに、労働力、蓄力不足が解消され始め、互助組の存在意義が薄れてきた。郭玉恩は、新しい増産方法を求める人々の声を汲み取り、技術向上をスローガンにして、土壤改良、農具改良、水利建設等を試み、その成果を互助組を通して普及させた。一九五〇年、組織化と技術向上とを結合させた模範を生み出した功により、郭玉恩は、山西省農業労働英雄一等の一人に選ばれている。川底村の組織化は愛国主義増産競争運動で更に進み、一九五一年春、長治専区における初級合作社試行の際、平順県初の合作社が設立された。当初はやたらと騒がしい一団で、互助組よりも労働効率が悪かったという。郭玉恩は、作業班を作って労働を組織化し、一九五二年春には合作社を十八戸から四十八戸に拡大したが、社員の間には、「力を出しても出さなくても労働点数は同じ、休み休み働く方が得」という態度が広がっていた。この頃、平順県委員会は各合作社に包工制（作業を請負う）をとり入れるよう呼びかけていた。これに応じて川底村合作社も包工制を採用、実用にあわせて改良を重ねた結果、労働をさぼる者は減ったが、それでもやはり社員一人一人が生産量に気を配らないので、一九五三年から包産制（生産量を請負う）も導入した。こうして、経営管理が計画的に行えるようになった。

後に趙樹理は、この運動にかかわっていた時期を多少の自負を交えて語っている。

村人は、私の手助けが必要な時もあった。動員をかけたり、規則・制度の制定、会計などの仕事である。当時、農村は集団化し始めたばかりで、仕事の種類がとても多かった。利益分配などは、全く計算しきれない。（中略）労

働分配も、いいかげんな帳簿しかなく、方法を考え出して原則をさぐりあてねばならぬと思った。それから、私はある村（川底村）に四ヶ月余り滞在したが、ここで記帳方式を考案した。かなり単純明解で、この方法は後に全専区で皆が使用した。⁽¹⁸⁾

一九七九年、川底村を訪れた田培植は、郭玉恩の語る次のようなエピソードを伝えている。

彼（趙樹理）は、私を励まして、いつもこう言っていた。我々はいち早く合作社をやり始めたのだから、失敗は許されない、モデルを作り出さねば、と。私は二百人余りを擁する合作社を率い、どうすればよいのかわからなかったが、趙さんは、近所に大農家があり、何代も分家せず、八十人以上の人間をかかえながら、秩序よく管理されているときいて、私を連れてその大農家へ学びに行った。その村には、「旗杆院」（『三里湾』冒頭に登場する屋敷の名）があった。⁽¹⁹⁾

また、『趙樹理伝』⁽²⁰⁾には、会計の人材を育てるのに趙が尽力したこと、刀把上の持ち主である貧農の社員に水路開鑿のための刀把上提供説得工作に趙があたったこと等が記されている。

川底村滞在中、趙樹理は「郭玉恩伝」⁽²¹⁾に郭玉恩が率いる川底村の集団化の歩みを織りこんだ。翌一九五三年には、「一枚の別れの写真」をしたため、『三里湾』に描かれることになる合作社の組織、そこに働く人々を紹介している。七十戸の加入戸数に対して、村政府主席をはじめ、六十人もの幹部が必要であり、しかもそのうち五十一人は兼任不可能なこと、合作社を支える多くの組織、仕事に必要な知識を得るための学習、そして膨大な量の仕事をこなしていく人々。仕事におわれて写真に入る暇もなかった人々の姿も思い起こしつつ、趙樹理は彼らを次のように評した。

もちろん彼らにも欠点はあるし、欠点はまだ多いが、彼らの自覚は日ましに高まっており、欠点は日ましに少なくなっていく。しかも、集団化が進めば進むほど、遅れた部分が表面化して影響を与える機会も少なくなる。

さて、執筆までの経過を趙樹理の言葉でまとめておこう。

私は、これまで農業生産を描いたことがなかったが、彼らの今回の試み（一九五一年の武郷県初級合作社）が確実な成功をおさめたので、農業生産を描きたくなった。しかし、私は今回の試験のうち、合作社設立以前の仕事に参加しただけで、十全な社会生活の形態を頭の中に形成することができず、更に多くの實際生活に参加してから着手するしかなかった。二年目（一九五二年）には、最初から試験が行われていた合作社（川底村）へ行き、彼らの生産・分配・合併・拡大等の工作に参加し、一九五三年冬、執筆を始めた。⁽²³⁾

趙樹理が執筆にとりかかって間もなく、中共中央委員会「農業生産合作社の発展についての決議」（一九五三年十二月）が発表され、全国的に合作社が急増したが、あまりに急激な集団化は生産性の増大につながらず、むしろその停滞もしくは後退をすらひきおこしていたという。この状況が趙樹理に「問題」を投げかけた。

『三里湾』を書いた時、私は一つの解決しなければならぬ問題を感じた。即ち、農業生産合作社は拡大すべきか否か、資本主義的思想を持つ人や、農業社拡大に抵触する人を、いかに批判すべきか、ということである。当時、いくらかの地方では、ちょうど農業社を収縮している所だったが、私は、社はやはり拡大しなければならないと考えたので、この小説を書いたのである。⁽²⁴⁾

この時期にも川底村は一つの模範を示している。『中国農村の社会主義高潮⁽²⁵⁾』は、平順県川底村農業合作社が制定した「ある合作社の農業技術操作規定」を収め、次の様な前言を附す。

一九五四年、わが省（山西省）の農業生産合作社数は、三万一千余りに達し、入社戸数も全農家の四一・五%を占めた。このことは、わが省の農業集団化運動が、既に大きな発展をとげたことを示す。しかし、現状を見るに、増産のための各種技術指導工作は、まだまだ農業集団化運動発展の必要に遠く及ばない。各地の農業生産合作社には、

ある程度まとまった農業技術操作制度すら無く、多くの社では、農業科学技術を細かく検討することなく、依然として旧い習慣に従い、盲目的に仕事をしている。多くの社では、耕作方法が非常に大まかで、増産の任務は保証されず、合作社の安定、発展にも直接影響している。このような状況を改革するために、各級の党員は、この工作の指導を重視しなければならない。

中国の多くの論者が、郭玉恩の内に『三里湾』の党支部書記王金生のみならず村の科学者王玉生のイメージを見出し、ているのも納得できよう。

『三里湾』を発表した年のはじめに、趙樹理は「合作社の果実を食う」という言い方のあやまりを論ず」という一文を《政治学習》（一九五五・三）に載せた。土地の少ない者、瘦せている者が合作社に加入して収入を増やしたのを見て、合作社の果実を食う（吃社果）と揶揄するのは誤りである。なぜならば、彼らの増収は当然の労働報酬であり、彼らの労働によって合作社の収益、各社員への分配量も上がっているからである、幹部が頭を働かせて労働力分配、土地利用をうまくやれば問題はない。このような論旨の間に、趙樹理の故郷では三ムーの野菜をすっかり耕作すれば二十ムーの畑に相当すること、川底村農業合作社では、一ムーのトウモロコシの豊産田を試みたところ、生産高が三倍以上になったことを挙げ、集団化が可能にする合理的な労働力、土地利用の利点を述べた上で、ここでも従来の土地経営に合作社をなぞらえている。

千五百ムー（約一〇〇ヘクタール）の土地を経営する地主が、ある年、余分に二十人の作男を雇ったとすれば、彼はこの二十人から他の作男同様、労働の成果を搾取しただろう。彼は搾取するために頭を働かせるからである。社員が社会主義の道を歩むよう導く合作社の社長が、搾取する者より頭を使って悪いことがあるか。

『三里湾』における組織化された労働風景の描写は、以上のような試行錯誤の忠実な反映であり、合作社の成功、即ち主線の解決に欠かせぬ役割を果たしている。一九五一年、趙樹理は合作社試行問題を扱った『表明態度』を上級の政策に従い互助組に書きかえた⁽²⁶⁾という。それが可能だったのは、集団化された農業生産を描いていなかった、描く準備がなかったからであり、『三里湾』の場合には、書きかえは不可能である。

現実世界においても作品世界においても、趙樹理は、従来の土地経営を労働価値説からとらえなおし、『三里湾』の王申に代表される篤農家タイプの中農を、生産目的から生産工作自体へと興味を移していく王玉生らに継承させることで、合作社という新しい集団化方式を模索し根づかせている。川底村を報じる取材文が、一様に党員で労働英雄の郭玉恩を全ての工作の先導者に行っているのに対し、彼と工作をともにした趙樹理が、「一つの作品の中では、当然いくらか集中させ、いくらか不必要な人物を省き、数人の代表的な人物をきわだたせるのがよい」としながらも、「一人一人が各々の役割を発揮してやる」「実際の工作」に則した作品化をしているのは、あながち「創作前の準備不足」⁽²⁷⁾による「欠点」とのみみなせぬ意図があるように思われる。『三里湾』の構成・手法は、新旧入り混じって古いものを引きずりながら新しい世界を創っていく集団化運動の統合体を示すために、意識的にとられた方法だったのではないだろうか。

四

『三里湾』発表後まもなく、現実の農村は、趙樹理の描いた初級合作社を越えて、高級合作社、更には人民公社へと組織されていった。この変化は、『三里湾』評価にも大きな影響を与えている。

『鍛煉鍛煉』（一九五八年）をめぐる、文芸作品はどのように人民内部の矛盾を反映するかについての討論が活潑になされていた一九五九年、趙樹理は『三里湾』をとりあげて、次のように語っている。

この小説は、資本主義思想と右傾保守思想とを批判したものであり、人民内部の矛盾として書いたのである。作中に敵対矛盾（もと地主・富農の合作社に対する妨害）がないのは、手抜きだと言う人がいるが、私は同意しない。⁽²⁸⁾

『三里湾』に対するこの種の不満は、発表直後から提出されており、それに対して趙樹理は「富農が農村で引き起こす悪い作用は、具体的に目にしなかったので、全くとりあげなかった」ことを『三里湾』の「欠点」の第三に挙げていたが、一九五六年六月になると、語調が一変して、強い否定表現になっている。

私は創作において、いつも作家を束縛するしきたりを感じる。（中略）私が『三里湾』で地主の妨害を描いていないと批判する人がいるが、それではまるで、農村を描く作品は全て地主の妨害を書かなければならないかのようである。⁽²⁹⁾

後に人性論批判を受けることになる巴人は、『三里湾』読後感（一九五七年『遵命集』所収）で、『三里湾』の舞台が老解放区であることと、中国における富農経済は、元来発達していないこととの二つの理由から、作品に反映される階級闘争は熾烈なものにはなり得ないと述べ、趙樹理が「欠点」としていることは、中国農村のある特定の生活状況の真実の反映であるのかもしれない、と援護している。

長治第四師範時代からの親友の王中青は、逆の結論を導き出す。

もし、彼（趙樹理）が、地主・富農の破壊活動と個人農の抵抗の言動をさしはさんでいれば、この闘争（農村における階級闘争）の展開は、もっと複雑で、曲折した、尖鋭なものになり、説得力や教育的意義も、もっと高くなっていただろう。もちろん、趙樹理同志が視察した地区は、地主・富農の活動があまりめだたず、個人農も少なく、この地区における集団化運動の主要な障碍は、この点（地主・富農の破壊活動）にはないかもしれない。⁽³⁰⁾しかし、現実の一般的状況、階級闘争の法則を反映するには、これらの状況を描かなければならない。

川底村についていえば、一九五二年において既に全九十四戸中九十三戸までが中農化（昔からの中農は九戸）されており、残る一戸は昔の富農で、つるしあげられすぎて、生活程度が低い。一九四八年に、いわゆる「貧雇路線」が是正されてからは、拡大再生産に励んできた村である。趙樹理は、ここに地主・富農の破壊活動を見なかったから、作品にも反映しなかった、という素朴なリアリズムによったのでは、もちろんなからう。個人農への個別的援助よりも、合作社拡大を、あるべき姿として選んだが、それは、毛沢東の「關於農業合作化的問題」に顕在化している階級闘争激化論を根拠にするものではない。五九年段階で、人民内部の矛盾という言葉を使っているのは、敵対矛盾を描いていないという批判が誘引したものであり、執筆当初から人民内部の矛盾として描くことを強烈に意識していたとは考えにくい。集団化の過程に現れる問題を人民内部の矛盾としてとらえていたからこそ、思想的変革を経験せぬ人間も、集団化の流れに合流し得るように描いたのである。

一九六〇年代、趙樹理は、文学とは人の心に訴えかけて教化する（勸人）ものであるとしばしば語り、自作を「問題小説」と呼ぶことは少なくなっている。「勸人」も、現実をより望ましい方向へ導こうとする点で「問題小説」に包含され得るが、「問題小説」の持つアクチュアルな響きはない。その背後には、先に見た『三里湾』評価の如き、硬直した思想分析による文芸批評への批判もあるが、それ以上に、一九五〇年代後半以降の経験から趙樹理がつかんだ問題が国家と集団との矛盾⁽³¹⁾だったことが大きな理由だろう。これは彼にとって軽々しく小説のテーマになどできるものではなく、本稿のはじめに紹介したように、建議書という形をとらざるを得なかった。

このことは『三里湾』自己評価にも影響している。趙樹理は、『三里湾』をとりあげて、小説の主要な役割は、読者が心の中で擁護すべき人間を擁護し、反対すべき人間に反対するよう導くことであるから、作品に表された運動は過ぎ去っても、そこに登場する人物は、なお現在の読者に語りかけてくる、と言う⁽³²⁾。これは、「勸人」という主張の延長で

あり、解決しなくてはならない問題を作品に表現できなくなったことが趙樹理の文学観・創作態度に与えた影響を考えるなかで、趙樹理の人間観とともに改めて問題にされなければならない言葉であり、『三里湾』という作品を評価するのに、この言葉に従って個々の人物形象に着目するだけでは、やはり不十分である。それでは、反面人物ばかりが目立ち正面人物に十分な展開がないまま問題が解決され、青年たちの恋愛も不自然な形で大団円を迎える、ということになり、五〇年代前半の集団化運動が持っていたみずみずしさを表現した『三里湾』の魅力はつかみきれないだろう。

五

趙樹理は、農村工作を創作活動に優先させた。

下郷した公社で、大衆とともに仕事をして、増産のカギをつかんだことで食糧が数万斤多くとれたとしたら、私はこれは小さなことではないと思う。この時には、精神的食糧は描き出せなかったとしても、物質的食糧を生み出すのも素晴らしいことだ。⁽³³⁾

趙樹理の小説は、現実に対する強烈な問題意識から生まれる。“物質的食糧”を生み出す農村工作こそが、“精神的食糧”の創作動機を生むのである。農村工作者として生きることと文学を生む“助業作家”の道を選択したことは、趙樹理文学に一定の枠をはめた。

土地改革運動における中農の利益侵害を問題にした『邪不压正』（一九四八年）に対して寄せられた多くの批判に答えて、趙樹理は次のように述べている。

（小説の）客観的な効果と自分の主観的な願望とがかけ離れているという点については、急には正しい判断を下すことはできない。これら六篇の評論の作者は、皆土地改革に参加したことがあるにせよ、評論を書く時に使っている

言葉は、我々文芸界の専門用語である。しかし私が期待している主要な読者対象（土地改革中の幹部と大衆）からは、手紙を一通ももらっただけで、もっと多くの人の読後感を知る機会がなく、よって一般的な効果がいかなるものかは断定できない⁽³⁴⁾。

『邪不压正』は、同時期に書かれた趙樹理の土地改革運動に関する文章とあわせて読まなければ、中農問題が主題なのか結婚問題が主題なのか見分けられぬほど、現実への依存度が高い失敗作である。農村工作者の目から作品を生み出していく趙樹理の、現実の問題を共有している受容者に対する配慮が、マイナスに働いた例といえよう。『三里湾』においても、結婚問題の扱い方が安易であるように、これは趙樹理の作品の多くにみられる問題である。そして、本稿では踏み込めなかったが、党員としての意識が作品にいかに関与したかという問題がある。これらの問題を「文芸界の専門用語」と趙樹理が名づけた観点からのみ追究していったのでは、趙樹理が自ら枰を課することによってつかみ得たものに触れることはできないだろう。

注

- (1) 工人出版社・山西大学合編、工人出版社、全四巻。文集出版以降発見されたものを、董大中編録『趙樹理文集補遺』（中国作家協会山西分会印、一九八二・四）董大中編『趙樹理文集続編』（工人出版社、未刊）に収める。
- (2) 王中青・李文儒「記趙樹理の最後五年」（『新文学史料』一九八三・三）に詳しい。
- (3) 「在大連「農村題材短篇小説創作座談会」上の発言」（『趙樹理文集』第四巻所収）は、趙樹理の発言のみを録したもので、前後のつながりが不明瞭である。
- (4) 「回憶歴史、認識自己」（『趙樹理文集』第四巻所収）。
- (5) 『中国の現代文学』（東京大学出版会、一九七二・六）二二七頁。

(6) 「趙樹理同志談『花好月圓』」《中國電影》一九五七・六。

(7) 「讀趙樹理的『三里灣』」《文芸報》一九五五・二〇。

(8) 魯達「缺乏愛情的愛情描寫——談『三里灣』中的三對青年的婚姻問題」《文芸報》一九五六・二。

(9) 北京師範大學中文系進修班文芸理論組「討論趙樹理的『三里灣』」《文芸學習》一九五七・七。

(10) 『中國の榮光と悲慘——評伝趙樹理』(玉川大學出版部、一九七九・十二)九九—一〇〇頁。

(11) 「談談花鼓戲『三里灣』」《湖南文學》一九六三・一一—一二。

(12) 俞林「『三里灣』讀後」(《人民文學》一九五五・七)の他、康濯(注(7)参照)等も指摘している。

(13) 注(11)参照。

(14) 「『三里灣』寫作前後」《文芸報》一九五五・一九。

(15) 注(14)参照。

(16) 注(4)参照。

(17) 川底村に關する以下の記述は、正晶、玉秀「組織起來與提高技術相結合的榜樣——平順川底村郭玉恩的模範事蹟」(《山西日報》一九五〇・一二・一)范長江「川底村的農業生產合作社」(《人民日報》一九五二・三・二二—二三)趙憲斌「『問題簍子』里的問題是怎樣解決的——記郭玉恩農業生產合作社的成長」(《人民日報》一九五二・一一・二四)藍邨「郭玉恩農業生產合作社為什麼要實行『包工包產』制」(《人民日報》一九五三・三・一二)などによる。

(18) 一九六二年十月広西桂林市文芸工作者、文芸愛好者座談会の講話記錄「生活・主題・人物・語言」《新文學論叢》一九八〇・二。

(19) 「老趙是咱社里的人」《山西日報》一九七九・一・九、《人民日報》一九七九・一・二二。

(20) 高捷・劉芸灝・段崇軒・郇忠武・任文貴、山西人民出版社、一九八二・八。

(21) 『趙樹理文集』第四卷所収。

(22) 《人民日報》一九五三・二・三、『三復集』(作家出版社、一九六〇・七)所収。

(23) 注(14)参照。

(24) 「当前創作中的几个問題」《火花》一九五九・六、『三復集』所収。

(25) 中共中央辦公厅編、人民出版社、一九五六。

(26) 注(4)参照。

(27) 注(14)参照。

(28) 注(24)参照。

(29) 「作家協會創作委員會各組座談『百花齊放・百家爭鳴』發言摘要」(原載《作家通訊》一九五六・六)、『趙樹理文集』第四卷所収による。

(30) 「談趙樹理的『三里湾』」《人民文学》一九五八・一一。

(31) 『三里湾』ではこの点が非常に楽天的に書かれている。尚、范長江(注(17)参照)は、「川底村農業生産合作社のすみやかな發展は、人民銀行の融資の效果と切り離せない。国による銀行の融資は、再生産のための投資を速かに拡大し、公共財産の蓄積を加速した。」と記している。

(32) 「与讀者談『三里湾』」(《文芸報》一九六二・十)参照。

(33) 注(24)参照。

(34) 「關於『邪不压正』」《人民日報》一九五〇・一・十五。

追記 注(1)の『趙樹理文集補遺』等、董大中氏からの寄贈書を拝見させて頂いた和光大学教授の釜屋修氏に、深く感謝致します。